

熊谷で没した歌人 安藤野雁

学芸職人 鯨井邦彦

1. 野雁の人となり

野雁の少年時代の名は北村謙次（謙治、謙二とも記す）、のち安藤政美、通称刀禰、号を野雁。「野雁」の雅号の「雁」という文字は、「雁」とも「厂」とも用いられ、また「のかり」とも「ぬかり」とも読ませているが、熊谷では「雁」を使用し、「ぬかり」と読むのが一般的である。

さて、野雁とはどんな人物であったのか、その経歴等を簡単に記してみると、野雁は、文化一二年（1815）三月四日、岩代国（福島県）桑折村に生まれ、慶応三年（1867）三月二四日、武州熊谷の荒川の畔で逝っている。享年 53 歳であった。

父は代官所役人北村新兵衛重有。半田銀山方組頭安藤裕次政直の婿養子となり、安藤政美を名乗る。代官手付（代官に直属して事務をとった役人のこと）として寺西蔵太元榮に仕え、主君が西国郡代に栄転したことにより豊後国（大分県）日田に赴任する。

しかし、この地で主君の寺西氏と妻の須磨を失い、江戸に出て和学講談所（塙保己一が創設した学舎）に入塾し、将来を嘱望されていたが、数年後に離塾して、東海道筋や上州、越後等の各地を歴遊し、晩年は熊谷甲山の根岸家に身を寄せている。

幼児より和歌を良くし、長じて信夫郡（福島市）瀬上の内海永年に師事、更には本居太平、村田春門らに学び、そして日田の碩学広瀬淡窓には、その学識をほめられている。

独自の歌風を創り出し、生涯酒を愛し、破れた服装や縄帯等の奇行と相まって、幕末の歌人の中でも異色の存在として知られていた。

著作も多く、万葉集新考、野雁集、刀禰記、道乃菅能根胄山防戦記、大伴家持卿伝等を著している。

2. 野雁と根岸家と熊谷宿

甲山の根岸家とはどのような係わりがあったのか簡単に記してみると、野雁が甲山の根岸家に滞在するようになったのは、文久二年（1862）の 47 歳頃ではないかと言われている。

野雁が、根岸家の食客となったのはどうしてかということについてははっきりしないが、後の研究者たちの推論を幾つか列記してみると、

- (1) その一つに、浜館貞吉説では、手習師匠の待田宗隠や医者志村立庵の和歌仲間の一人に、鍛冶屋の奥野貢太郎がいて、彼が鍛冶修行のため江戸に出

た折、野雁と知り合い父の伝四郎が懇意にしていた甲山の根岸友山に紹介したのが、その始まりではないかとい説である。

(2) またもう一つの説は、野雁が塙塾の誰かから根岸家の存在を知って甲山へいったか、いずれにしても野雁が塙塾を通じて根岸家と結びついたという可能性もある。等の推測ができるが、確かなものと断定できないかも知れない。

野雁が来た頃の根岸家は、11代友山(54歳)が隠居して12代武香の時代であった。

根岸家の食客となった野雁は、根岸家に止まらず、熊谷宿の弟子達の家や平塚新田の大尽山下林作家に、気の向くままに滞在していたようである。野雁が残した書簡の中に「わたくし事 熊谷宿奥野伝四郎、志村立庵、甲山にて根岸伴七此三軒之内へむけ御さし遣し可被下候」とあるように、主に奥野家、志村家、根岸家の三軒を回っていたことがわかる手紙である。

この三軒の他にも弟子達の家々を転々と巡り、講義、添削、揮毫そして酒を愛した生活で、弟子達も喜んで、面倒をみていたようである。

野雁51歳の慶応二年(1866)六月十三日、北武蔵(上名栗村)に起こった「武州世直し一揆」は、一五日に坂戸から松山へ、そして一六日には根岸家も目標になった。当時武春が江戸に出て留守だったので、隠居友山(58歳)が陣頭指揮をとり、野雁も加わって退けた。

野雁はその逐一を『冑山防戦記』としてまとめている。歌人・国学者らしく名文で綴られ、この時の様子が良くわかる文献史料となっている。

野雁は、根岸家の加護のもとに豪壮な邸内の一室を与えられ、悠々自適な生活をおくり、講義や添削や揮毫をしたり、最後の著書『万葉集新考』の草稿に手を加えている中、死亡したため、上梓をみていない。

終生酒を愛し服装に頓着しない歌人らしく熊谷の荒川大橋付近の堤の上に「ゑ(酔)ひみだれ 花にねぶりし 酒さめて さむしろ寒し 春の夕風」という熊谷では有名な歌碑が建っている。

なお、今年(2016年)は野雁没後150年ということで、10月には生誕地の桑折町で、「遺墨展」が開催されている。(文中敬称略)



安藤野雁歌碑

(熊谷市公連だより 第22号 平成28年より)